主日礼拝説教「留まるときも、旅立つときも」

日本基督教団石神井教会　2019年1月20日

【旧約聖書日課】民数記　9章15～23節

15幕屋を建てた日、雲は掟の天幕である幕屋を覆った。夕方になると、それは幕屋の上
にあって、朝まで燃える火のように見えた。16いつもこのようであって、雲は幕屋を覆い、
夜は燃える火のように見えた。17この雲が天幕を離れて昇ると、それと共にイスラエルの
人々は旅立ち、雲が一つの場所にとどまると、そこに宿営した。18イスラエルの人々は主
の命令によって旅立ち、主の命令によって宿営した。雲が幕屋の上にとどまっている間、
彼らは宿営していた。19雲が長い日数、幕屋の上にとどまり続けることがあっても、イス
ラエルの人々は主の言いつけを守り、旅立つことをしなかった。20雲が幕屋の上にわずか
な日数しかとどまらないこともあったが、そのときも彼らは主の命令によって宿営し、主
の命令によって旅立った。21雲が夕方から朝までしかとどまらず、朝になって、雲が昇る
と、彼らは旅立った。昼であれ、夜であれ、雲が昇れば、彼らは旅立った。22二日でも、
一か月でも、何日でも、雲が幕屋の上にとどまり続ける間、イスラエルの人々はそこにと
どまり、旅立つことをしなかった。そして雲が昇れば、彼らは旅立った。23彼らは主の命
令によって宿営し、主の命令によって旅立った。彼らはモーセを通してなされた主の命令
に従い、主の言いつけを守った。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一　1章1～9節

1神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネ
から、2コリントにある神の教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キ
リストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とさ
れた人々、召されて聖なる者とされた人々へ。イエス・キリストは、この人たちとわたし
たちの主であります。3わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和
が、あなたがたにあるように。

4わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けたことについて、
いつもわたしの神に感謝しています。5あなたがたはキリストに結ばれ、あらゆる言葉、
あらゆる知識において、すべての点で豊かにされています。6こうして、キリストについ
ての証しがあなたがたの間で確かなものとなったので、7その結果、あなたがたは賜物に
何一つ欠けるところがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れを待ち望んでいます。
8主も最後まであなたがたをしっかり支えて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、
非のうちどころのない者にしてくださいます。9神は真実な方です。この神によって、あ
なたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。

【福音書日課】ルカによる福音書　4章16～30節

16イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を
朗読しようとしてお立ちになった。17預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次
のように書いてある個所が目に留まった。
18「主の霊がわたしの上におられる。
貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。
主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、
目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、
19主の恵みの年を告げるためである。」
20イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエ
スに注がれていた。21そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にし
たとき、実現した」と話し始められた。22皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言
葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」23イエスは言われた。「きっと、
あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウム

でいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」
24そして、言われた。「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないも
のだ。25確かに言っておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯
に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、26エリヤはその中のだ
れのもとにも遣わされないで、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。
27また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいた
が、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」28これを聞いた会堂内の人々
は皆憤慨し、29総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで
連れて行き、突き落とそうとした。30しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られ
た。

七日の旅路

昨日から今日にかけて、全国で 50 万人以上の青年が大学進学のための試験に臨んでいます。それは、多くの青年たちの人生の選択のひとつにすぎないのでしょう。そうであっても、わたしたちの周囲に少なからずその道を選んで進もうと願い、今まさに奮闘している青年たちがいるのも事実です。その道にしろ、他の道にしろ、わたしたちの後に続いて生きる若い世代が、確かな道を選択してほしいと思います。何よりも、その道を、ただ一人自分だけを頼りに行く道としてではなく、わたしたちを生かし、養い、用いてくださる神と共に行く道として憶えてもらいたいというのが、わたしたちの祈りなのではないでしょうか。

多くの教会で「18 歳の壁」を超えることが課題になっています。教会に、学校の紹介で、あるいは親に連れられて、日曜日ごとに通って来ていた子どもたちの多くが、18 歳を境に寄り付かなくなるのです。教会学校（こどもの教会）のフォローする年齢を終えると共に、教会そのものから「卒業」してしまうようなのです。確かに、生活や交友関係が大きく変わる時期ですから、日曜日の用い方に変化が起こるのも仕方のないことかもしれません。

青年に限らず、生活や仕事のスタイルが多様化している時代ですから、教会も、日曜日の午前中に礼拝をしているだけでなく、夕礼拝や平日礼拝など、別の時間帯や曜日に教会の営みを広げていくことも必要なのかもしれません。

週に一度、教会に足を運び、集められた人たちと共に礼拝にあずかり、交わりを持ち、再び日々の生活に戻っていく。そのような生活のサイクルがどれほど大切なことか、今ここに集められている皆さんは、よくお分かりだと思います。七日の旅路を終えるごとに、ただベッドの上で肉体の疲れを休めるだけでなく、ただレジャーを楽しんで心理的な疲労をいやすだけでなく、わたしたちには、神の前に安息する霊的な回復が必要なのです。それこそが、わたしたちの七日の旅路の歩み方、生き方、ふるまい方を方向づけてくれるものだからでしょう。

神と共に生きる。このことが、いかに幸いなことか。わたしたちは、青年たちや周囲の人々に、そのことをうまく伝えられていないのでしょうか。実のところ、わたしたち自身が、そのように歩み切れていないということなのでしょうか。確かに、わたしたちは、イスラエルの人々と比べて十分に、主の命令によってとどまり、主の命令によって旅立つ者であるとは、言えない者かもしれません。

恵みの言葉が告げられるとき…

神学生時代、ある同級の神学生が、「自分の教会では、日曜日の礼拝に集まってくる人たちのことは『お帰りなさい』と出迎え、礼拝を終えて家に帰っていく人たちのことは『行ってらっしゃい』と送り出す」と話してくれたことがありました。それは、ちょっとしたカルチャーショックでした。わたし自身は、中高生の頃から多くの友人と教会に入り浸り、日曜日だけでなく平日にも教会で長時間を仲間たちと過ごすという生活をしていたことのある者でした。教会は、確かに自分の「居場所」の一つでした。けれども、教会が「お帰りなさい」と出迎えられ、「行ってらっしゃい」と送り出されるところだという感覚は持ったことがなかったのです。今は、皆さんのことを、そのような感覚で教会にお迎えし、また送り出しています。少なくとも皆さんを学校の教室に招き入れるような感覚でお迎えしたりはしたくない、と思っているのです。

「お帰りなさい」とお迎えしたところであれば、皆さんが何よりもリラックスして礼拝に臨んでいただきたいと願っています。七日の旅路で閉ざしていた心を開放し、頑なにしていた思いを解きほぐし、いっそのこと何もかもぶちまけていただいてもよいのです。礼拝中に平気で居眠りできるようになられたら、わたしは、皆さんがようやく心開いてくださったと、安心することでしょう。

もちろん、わたしたちは、日曜日の教会に集まり、礼拝にあずかるとき、祈り讃美すると共に、御言葉を聞くのです。聞くためには、目を覚ましていなければいけないでしょう。理解するためには、一言一句を聞き逃さない注意力も必要かもしれません。けれども、わたしたちが言葉を聞くのは、その言葉の意味を厳密に理解するためばかりではありません。その言葉を語る人と関係を持つためです。わたしたちは、たとえ理解できない外国語を話す人であっても、あるいはまだ言葉にもならない音を発するばかりの幼児であっても、相手と関係を持ちたいと思えば、一所懸命にその人の語る言葉に耳を傾けるものでしょう。

福音書日課・ルカ 4 章で、主イエスは故郷ナザレにお帰りになられて、安息日の会堂の礼拝に参加されていました。礼拝では、そこに集まった者たちによって聖書が朗読され、その説きあかしが語られました。久しぶりに故郷に戻った主イエスも、その役割を担われたのです。

イザヤ書（61 章）を朗読された主イエスは、会堂に集まった人々に向かって言われました、「**この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した**」。それを聞いた人々は皆、主イエスの口から出る言葉を、**恵み深い言葉**（＝恵みの言葉）と受けとめ、驚いたのです。幼時から知っている男の言葉としてではなく、恵み深い神の言葉として響いたからでしょう。そのように響いたのは、何よりも、主イエスご自身が聖書の言葉を神の言葉としてお聞きになられ、恵みをもって臨んでくださる神との関係の中にお立ちになられていたからに違いありません。これは、しかし、今も、わたしたちの礼拝の中で起こりうるべきことなのです。御言葉を聞くとき、わたしたちは、神との親しい関係、深い交わりを願って、御言葉の語られるのを聞いているのです。

主イエスが進み行かれるところへ

皆さんが、ここで、御言葉をそのように受けとめることができずにいらっしゃるとしたら、それは説教者の責任であるかもしれません。説教者の語る言葉が恵み深い神の言葉として皆さんの中に響いていないとしたら、説教者自身が聖書の御言葉を恵み深い神の言葉として聞くことができていない、つまりは神との親しい関係、深い交わりの中で神の言葉を聞いていない、ということであるかもしれないからです。

けれども、皆さんがもし、ここで本当に神の恵み深い言葉を驚きをもって聞かれるようになったら、何が起こり始めるか、ご存知でしょうか。そのときには、皆さんが恵みに満たされて、満足して満面の笑みで、それぞれの生活に帰っていく、ということになるのでしょうか。そうであれば、説教者には大変分かりやすいし、対策を立てやすいことになります。皆さんが満足するような言葉を語り、帰り際に「恵みでした」「満たされました」と説教をお褒めくださるかどうかを確かめればよいのですから。しかし、そうとは限らないと、今日の福音書日課・ルカ福音書は、わたしたちに釘を刺しているのです。

主イエスが聖書を朗読され、説き明かされたとき、その恵み深い言葉に驚かされた人々は、主イエスのことを褒めたばかりではありません。むしろ、心がざわつき始めた者たちがあったのです。「この人はヨセフの子ではないか」と、主イエスに対してケチをつけ始める者さえ出てきたのです。きっと、ナザレの会堂に集まっていた人たちは、少年時代の主イエスのことも、その父親ヨセフのことも、よく憶えていたのでしょう。その記憶は、必ずしも良いものばかりではなかったのに違いありません。「あいつの語ることが信用できるか。ありがたいか」と。

そのとき主イエスのお答えになられた言葉は、どこか喧嘩を売っているような、相手を挑発しているような、激しさを感じます。なぜそのような言葉をと、思わされます。事実、その言葉を聞いた人々は、ますます拒絶反応を示して、終いには皆、憤慨し、総立ちになって、主イエスを追い出しにかかったというのです。礼拝で皆さんに立てられる説教者は、とてもこの主イエスの真似をすることなどできません。結果は目に見えているからです。けれども、この人々の姿こそが、神の言葉を聞かされ始めた者の正直な反応を示しているのではないでしょうか。実際、わたしたちでさえ、神の言葉に、主イエスの言葉に、いまだ、内心のどこかで反発し、拒んでいるところがあるのです。

それでも、そのような自分の姿に呆れ、自分のことを憐れんだりなさらないでください。主イエスは、ご自分を拒んだ人々から逃れるのではなく、その人々の間を通り抜けて、別の方向に向かって行かれました。主を拒む者を打ちのめすのではなく、その真ん中を通って、行くべき別の道を切り拓いてくださっているのです。礼拝で神に向かい、神の言葉を聞き、神を喜びながら拒むわたしたちを、そこにいつまでも留め置いて悩ませるのではなく、主イエスは、わたしたちの心を切り拓くように間を通り抜けられ、進み行くべき新しい一歩をお示しくださるのです。その旅路は、主の行かれた道、真に神と共に行く道なのです。